



シライチモード

SHIRAKAMI CYCLE ROGAINING



シライチ

世界自然遺産白神山地を中心に据えた約300kmを自転車一周するサイクルルート。「ナショナルサイクルルート」の指定を目指し、イベントや調査、プロモーション等を行っています。2024年から白神の歴史文化や自然、風土を体感しながら走るイベント『シライチサイクルロゲイニング（愛称：シライチモード）』を実施しています。



年に一度、白神へ詣でるそれが「シライチモード」という走り方。ただ景色を眺めるだけではない。ただ距離を競うだけでもない。海から森へ。生きる意味と出会う。

自分で道を選び、その土地の文化や自然、人と出合いながら巡る。それが、白神式サイクルロゲイニング「シライチモード」だ。「モード（語：MODE）」には、毎年この地を訪れる『白神詣で』という意味と、自分らしいスタイル（Mode）で白神を巡るという二つの想いが込められている。

チェックポイントは各所に散りばめられており、このイベントには正解のルートはない。羽州街道の旧宿場町を辿るのもいい。日本海の潮風を浴びながら海岸線を走るのもいい。世界自然遺産・白神山地へ続くブナの森で立ち止まり、深呼吸するのもいい。

高得点を狙うのか、絶景を巡るのか、ご当地グルメを探すのかを決めるのは自分自身。走るたびに、自分だけの「白神詣で」が完成していく。イベントに参加し、ペダルを漕いでいるうちに、白神を巡礼している。地図を広げた瞬間から旅は始まっている。第一ステージ（大館）スタートに立つ前、参加者が向き合うのは一枚の地図。

広いエリアにチェックポイントが設定され、ルートを考える時間から、すでに旅は始まる。市街地を抜ける、羽州街道の面影が残る町並みや、地域が大切に守り続けてきた「人形様」



白神を背に走る

ペダルを止めた先で土地の物語に出会う

第三ステージ（大館・北秋田）。心に残ったのは、走る時間だけではなかった。道中で出会う景色が、旅を特別なものにしてくれた。シライチルートは、かつて人が自分の足で歩いた羽州街道が組み込まれている。そこには、人が効率を求めた大きなルートでは味わえない景色や時間が流れている。地域の人でも見逃してしまいそうな史跡や文化財。自転車を降りて案内板を読むたびに、この土地の物語や白神との関わりが少しずつ見えてくる。ポイントを集めるだけでなく、走り抜ければいい。でも、ここには立ち止まりたくなる。

エイド会場では「本場大館きりたんぽまつり・肉の博覧会」が開かれ、会場に広がる香りが疲れた身体を誘う。本場のきりたんぽはもちで比内地鶏のスープとの組み合わせが抜群であった。走った先で味わう地元料理は、どんな補給食よりも贅沢だった。

が迎えてくれる。その姿からは土地に受け継がれてきた暮らしや祈りが感じられた。

今回のみ鉄道を利用した輪行が必須。電車の時間を読みながらルートを組み立てる体験は、旅とゲームが重なるような感覚だった。

弘前へ入ると城下町や歴史ある寺社が点在し、今なお湧く湧水は今も人々の暮らしを支えている。自転車を降りて水に手を浸し、静けさに耳を澄ませる時間は、速く走るだけでは決して味わえない体験だった。



峠は輪行で移動もできる

森へ向かう道が「白神詣で」になった

第二ステージ（弘前・西目屋）。弘前の城下町を走り始めると、街並みの向こうに岩木山が大きく姿を現す。りんご畑を抜け、西目屋へ近づくと空気が少しずつ澄み、森の香りが濃くなっていく。あいにくの雨ではあったが、逆にそれが森の表情を変えていた。霧に包まれた白神の風景は幻想的で、晴れた日は違う魅力を見せてくれる。



ガイドブックではこぼれ落ちる
くらしの歴史に出会う

海から川へ、川から森へ

第四ステージ（藤沢・能代）。能代を流れる米代川。その流れをさかのぼり、さらに藤琴川沿いを進んでいくと、景色は少しずつ里から森へと表情を変えていく。

川の水は白神のブナの森から生まれ、人々の暮らしを潤しながら日本海へと注ぐ。自転車で川をたどることは、森の恵みが海へ届く一本のストーリーをたどることもあった。

標高が上がるにつれ、空気はひんやりと変わり、鳥の声が近づいてくる。やがて視界がいっぱいに広がるブナの森。

急ぐだけでは見えない景色がある。森と川、人の暮らしが一本の線につながっていることを、自転車だからこその感じるこができた。

シライチモード2026

2026年10月10日から12日には、日本海沿岸を巡るステージ。詳細は公式サイトへ。

【お問い合わせ】

環白神エコツーリズム推進協議会
TEL: 〇一八五七九二一一五
MAIL: contact@shirakamisanchi.org